新潟県立村上高等学校同窓会関東支部

わ宮

題字　宮　絢子
2011.5.15
第22号

発行人　佐藤　勝
編　集　山下　治郎
事務局　長谷川康夫
神奈川県川崎市
麻生区向原3-5-5
☎044(953)8368
ホームページ　http//www.murakou.com/~kanto/index.htm

村高卒の絆を新たに！

2011関東支部 同窓の集い ご案内

同窓の集いへのおさそい

今回は、新制二四回生が「同窓の集い」の準備・実行を担う事にとなった。我々は、現在、村上市役所がある場所にあった木造校舎で最後に卒業した世代である。後の学年は、現在の村上高校、すなわち村上駅近くにある校舎で卒業したはずだ。団塊世代の数年後に位置し、我々の学年は一学年が七クラスだった。

昨年一一月の第一回実行委員会は、卒業後四〇年ぶりの再会であった。うまくこの会を運べるものなのかと私は大変心配であった。同期生の人たちに会ってみると、女性の皆さんはやはりそれなりにふっくらとなり、男性の皆さんは頭に白いものが混じっていた。名前は知っているが、その名前によってイメージできる人とは別の人がそこに居た。当たり前である。イメージは高校生のままで止まっているのだから。誰が誰だかちょっと判らない。しかし、間もなく昔の面影がよみがえってきた。高校時代の話が一つ出て、その後は、あの時はあだった、この先生はこうだった、何々クラブの誰それはこうだったという話に盛り上がって行った。途切れることなく勝手に会は進んでいった。四〇年前にタイムスリップしていた。私の懸念は杞憂に終わった。

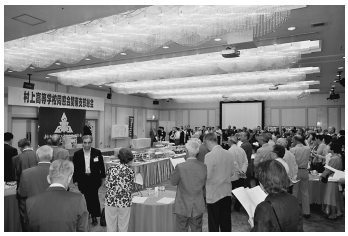
同窓の集いも同じだ。皆さん、すべての人と何十年ぶりの再会だとしても、何の戸惑いも要らない。参加者総ての人が、「村上高校卒業」という肩書きを持っているのだから。参加したことがある方はぜひ又今回も、まだ未参加の方はぜひ今回参加していただきたい。我々実行委員会は、皆様にいかにして楽しんで頂けるかと、知恵を絞っているところである。また、遠いふるさとを偲ばせるお土産も用意する予定である。諸先輩の皆様、諸後輩の皆さん、ぜひ参加して楽しいひと時をお過ごし願いたい。

（文　山本）

会　　長　佐藤　勝
実行委員長　山本　利春
新制二四回　実行委員一同

○とき
平成二三年七月二日（土）
正午より受付開始・一時開会
○ところ
スクワール麹町
千代田区麹町六―六
☎〇三（三二三四）八七三九
○アクセス
・JR中央線・総武線四谷駅下車
麹町口徒歩二分
・地下鉄丸ノ内線・南北線四谷駅
○会費
・男女とも　八千円
・平成一九―二二年卒　四千円
・新卒者（二三年卒）　無料
※会場準備の都合上、六月一二日（日）までに出欠のご返事をお願いいたします。

2010総会の様子



同窓会のさらなる飛躍を！

同窓の絆を強く

同窓会新体制の一年

関東支部会長　佐藤　勝（新14回）

まず最初に三月一一日に発生した東日本大震災の被害にあわれた多くの方々及び関係の皆様に対し心からお見舞い申し上げます。

日頃は同窓会活動へのご理解とご協力を賜りありがとうございます。同窓会関東支部会長の任を仰せつかり早二年の任期を迎えようとしていますがこの間、出来るだけ役員、幹事間でのコミュニケーションを大切にし、本校や各支部との交流も持てるよう心掛けて参りました。

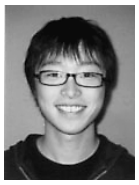
昨年は我が母校の創立一一〇周年という区切りの年でもあり、一〇月に行われた本校での立派な記念式典に参加させて頂きました。一昨年は事前に連絡頂いていた高崎支部が新たにスタートしたこと、昨年末には新潟支部の会合にも参加させて頂き、交流を図ることが出来ました。また三月一七日の第六三回卒業式に参加させて頂く予定だったのですが、先の大地震発生の数日後だったため交通マヒ、その他不安定要素が多かったことから参加出来なくなり残念でした。今年も二三五名の卒業生のうち八五名の若い同窓生が東京

に出てきています。例年以上に厳しい状況の中で社会に出てこられた彼らに対し、私達関東支部の同窓会の存在がいくらかでも心の支えになってあげられればと思っております。昔も今も、同じ故郷で生まれ同じ学舎で育った私達は先輩も後輩もやはり合い通じるものがあります。同窓会関東支部活動のより活性化、会員皆様の親睦と交流の拡大に向け、役員幹事、これからも力を合わせ努力して行きたいと思っております。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

（西東京市在住）

ドキドキ鏡割り

渡邊　卓（新58回）



始まりは一通の手紙でした。ある日家に帰ると一通の手紙が届いていました。それは佐藤会長からの関東支部同窓の集いの案内でした。

会長は村高のＰＴＡ会長をしていた私の父から、私達兄弟が東京に住んでいるという話を聞き、同窓の集いに招待して下さったということでした。

私は知っている人が誰もいないという不安がありましたが、招待をいただき、村高の先輩方とお話できるせっかくの機会でしたので参加させていただくことにしました。

当日不安と期待が入り混じる中で会場に到着すると、同期生どころか最も年齢が近い方でも私の父と同じぐらいの方でしたのでかなり緊張しました。

さらに会長から鏡割りをしてくれませんかと頼まれました。私は鏡割りのノウハウがわかりませんでしたし、私がしてしまってもいいのか、タイミングをはずしたらどうしようという不安でさらに緊張しました。しかし鏡割りは、会長が隣で教えて下さったのでうまく行うことができ、貴重な体験をさせていただき感謝しております。

会場についてから乾杯するまでは緊張しっぱなしの私でしたが、乾杯が終わると、同じテーブル・近くのテーブルの先輩方が話しかけて下さったので、不安と緊張が徐々になくなり、また同じ村高出身であるという親近感から話が弾みました。村高の思い出話や村上市のことなど、東京に来てからこのような共通の話題を持った人がいなかったため、とても楽しい時間を過ごすことができました。私は就職活動を控えていたので、先輩の皆さんからお仕事についてもお話をうかがいました。村高の先輩は皆温かい方々だなと感じました。

校歌斉唱では、高校の卒業以来でしたが、校歌を聞くと楽しかった三年間の高校生活がふと浮かび、あっという間だったなという想いと、もう一度高校時代に戻りたいなという想いがこみ上げてきました。

アトラクションでは、男性だけでなく女性も力強く、かっこよくすばらしい演奏でした。和太鼓演奏を楽しみながらお話ししているうちに、あっという間に閉会になってしまいました。もっと多くの先輩方とお話しする時間が欲しかったなと思います。

高校を卒業し年が経つにつれ、だんだん村高や村上の話ができる機会は減ってきます。そのため同窓の集いは村高や村上の思い出を話せるいい機会であり、また先輩方のお仕事のことなども聞けて、有意義で楽しい時間を過ごすことができます。若い人、特に大学生もどんどん参加して欲しいなと思います。

（文京区在住）

総会アトラクション裏話？

八藤後忠夫（新23回）

二〇一〇年度総会が成功裡に納められ、私たち文教大学和太鼓集団・打組出津龍（うちぐみ・でづりゅう）もささやかながらそのお役に立てたことを誇りに思い、改めてそのことに感謝いたします。同様に川又茂実行委員長以下、準備に励まれたすべての同期生に篤い信頼の念と連帯感を懐かしさと同時に確信させられました。

わが出津龍は八年前私が文教大学教育学部に他大学から異動した折、市民向け大学講座の一環として「こころと教育」というテーマを頂いたことに始まります。これは私が精神医学の概論や精神保健などの講義を担当していたからなのですが、それにしてもテーマは難解！こころに質量（かたち）はありませんから。

そこで「和太鼓でも叩いてみれば『心や魂』みたいなモノがみえるでしょう。講演題目は『和太鼓を叩く・からだに貞(き)いてこころを探す』でどうでしょう？」と冗談交じりに応えたものですからさあ大変！誰が叩くのやら、何を演奏するのやら。そもそも和太鼓は一台もなし。あるのは私の篠笛七本調子二管(本)のみ。ところが時は和太鼓ブーム。所属する研究室の学生がその気になり、太鼓は千葉県野田市の著名な団体からお借りし兎に角『ドンガラドンガラ』。大学周辺からは騒音苦情、学内の研究室は騒然。師匠などいませんから著名なプロ・鼓童のビデオを学生に見せて「まーずやれっしゃ！」。

八年後の現在は部員総勢三〇人近くとなり私は主宰から顧問に天下りです。

そんな情況下での『四谷上演』でした。当初は音のデカさが災いし上演は難航したようです。私たちも諦めていました。でもそこは流石に栄えあるムラコウ！大先輩が会場と交渉の上、出演が叶いました。お世辞にも人

さまの前で演奏できるレベルの内容ではありませんでしたが、若き学生たちをムラコウの先輩方々そして後輩の方々は実に寛大な心で受け入れて下さいました。感謝感激です。私が学生たちに思い入れていることはきちんと勉強することは勿論、学内に籠らないでドンドン地域に跳びだしてゆくことです。『太鼓担いで街をゆく』これを私は「学びの移動体」と呼んでいます。当日の総会終了後、とうに喜寿を超えられたとお察しする大先輩から私もまた勇気づけられました。「いやあ！いかったよー、久しぶりに木遣り聴いたあ！ここで聴かれっとは思わねかったんがねー！」と。

当日はアトラクションのでき具合ばかりが気掛かりで多くの方々と十分な対話ができませんでした。その失礼をお詫びするとともに、今後益々関東支部が意味のある発展を継続されてゆくことを祈って止みません。

（さいたま市大宮区在住）

◇平成二二年度の春の叙勲で星野利男さんが長年の警察関係のお仕事の業績で瑞宝小綬章を受章されました。受章された星野さんよりそのときの思いを寄稿していただきました。写真は、新三回生の有志による祝賀会の様子です。◇

回　想

星野　利男（新3回）

図らずも昨年五月に、叙勲の栄に浴し身に余る光栄と感激しました。叙勲に際し、皇居の豊明殿において天皇陛下に拝謁の折に陛下から「長い間、世の安寧のためご苦労様でした」と優しいお言葉をいただきました。私は感極まって胸にこみ上げるものがあり、過去への思いが走馬灯のように浮かんできました。

戦後の混乱と耐乏生活の暗いトンネルの先にかすかな灯りが見え始めた昭和二六年五月二一日に故郷山北を出奔しました。そして就職（警視庁）と進学（中央大学）の二股をかけて人生のスタートを切りました。勤務は、昼夜を問わずの過酷な環境でした。安月給からの入学金、月謝は身を削る生活でした。

入庁以来三八年間で二二箇所の所属を異動し、主に交通・警備・管理部門で仕事をさせていただきました。

交通部門を回想してみると、昭和三九年の東京オリンピック開催前後から、急激なモータリゼーションの進展が日本の社会経済に大きな飛躍をもたらしました。一方で交通事故の急増、公害の発生をもたらしました。私は交通戦争といわれた四〇年頃第一線で白バイ部隊の幹部として極めて危険な交通環境の中、神風タクシー、悪質ダンプカー、暴走族の防圧にあたりました。同僚の殉職者に涙を流しつつ、文字どおり身を挺して頑張ったと自負しています。その成果は、他の対策と相俟って死亡事故が三分の一まで減少し世間から大きく評価されました。一方、都内における慢性交通渋滞解消対策として建設省（国土交通省）との共管による「日本道路交通情報センター」設立準備に参加し交通の円滑と分散化に、知恵を絞り出しました。その間、ヨーロッパの交通管理の実態と運用センターを勉強視察してきました。今、テレビ・ラジオ・ナビなどの交通情報が流れるたびに当時の苦労と情報通信の進歩を感無量で見聞しています。

叙勲おめでとうございます

私の警察人生でもっとも大きな緊張と、印象が深かった仕事は、昭和の時代を力強くそして慈愛に満ちた心情で日本と国民のため生き抜いた人間昭和天皇に関する大きな警戒警備を果たしたことであります。

即ち「ご即位六〇周年式典」（昭和六〇年四月二九日、本所警察署長）

それから四年後崩御されました。「大喪の礼」（平成元年二月二四日、第四方面本部長）の警備であります。

いずれも外国の元首クラス、国内では政・官・財・学の要人が多数参加のもとで国を挙げての大行事でありました。これに対し極左暴力集団はこもごも式典爆砕を呼号しロケット弾を打ち、また沿道の妨害を図り、その勢いは日に日にエスカレートの一途を辿っていきました。この異常な警備環境の中、大阪・北海道、そして当庁部隊、ならびに管内の住民の一体的な連携によって無事任務を果たす事ができました。現場の指揮官として苦難の経験をし、その中で「国家観」「同士との絆」「己に克つ」ことの大切さを学びました。この二度にわたる大警備を最後の仕事として平成二年三月に無事退職いたしました。

過ぎ去りし激動の世に思いはせ
辞令うく朝心静かに

長い勤めの苦楽を共にした職場の仲間が絆を保ち「星友会」と名付け年二回美酒を傾けています。加えて私の退職の慰労に、故郷の村上で会を計画していただき、参加した会員一同に私の菩提寺の光済寺にて先祖の墓を詣でて頂きました。住職の恩師、安富先生が「君は良い部下を持って幸せだな」と堅く手を握ってくれたことも良き思い出となっています。

（練馬区在住）

思い出エッセー

あの日 あのころ いまじぶん

旧制村上中学回顧

―古き良き時代の思い出―

田仲　一成（併設中学第１回生）

私は、昭和二〇年三月、東京の小学校を卒業し、東京都立第八中学校に入学願書を出しました。東京は、三月から空襲が激しくなり、入学試験もできなくなって、定員三〇〇名を大幅に越えていたはずの志願者全員が無試験合格となりました。私の家は、空襲を避けるため、父の出身地、岩船郡大川谷村（府屋）に疎開することになり、母、祖父、妹は、私を残して先発しました。私は一人東京に残り、入学式を待っているうちに、満州にいた父が、急遽、帰京し、私を連れて、村上中学の門を叩き、転入をお願いしました。当時、私には、まだ志望校の合格証書は届いておらず、在籍証明の申請もできず、受験票だけを持参して、入学の証拠としたのです。全員無試験合格でしたから、受験票が入学許可の証拠となりえたわけです。校長先生と教頭先生は、父の話をじっとお聞きになったあと、その場で、無試験での転入を即決していただきました。このような次第で、私は、難関の村上中学に無試験で転入したのです。よくこのような温情措置をとっていただけたものだ、と、今でも不思議に思います。ひとえに藤沢校長の決断によるものと、深く感謝しています。

四月下旬に一年生に編入され、私の中学生活が始まりました。前在籍校での授業を一度も受けたことのない私にとっては、形式は転校でも、実質は新入学でした。すべての教科に新鮮な刺激を覚えましたが、同級生より二〇日ほど、遅れたため教科書の配布を受けられず、二年生から借りて写しました。教科の程度は、非常に高く、数学は、敵との距離を測るのに役立つ三角測量法、弾道学の基礎になる解析幾何学など、戦場で役立つ数学を習いました。物理で習ったフックの法則なども、代数学も習っていないため、比例計算を強いられました。基礎から順々に積み上げていくのでなく、直感に頼るエリート教育だったと思います。古典なども、古語文法などは、一切教えてくれず、いきなり、熟読を通して原文を理解するように教えられました。先生たちは、みんな立派な方でしたが、どなたも点が辛くて、歴史や地理の筆答問題（「なになにについて述べよ」という形式）では、よくてもせいぜい七〇点台どまり、八〇点をこえる点をもらえることは滅多にありませんでした。成績簿は各教科、点数で表示され、席次も記されていました。これは厳しすぎる評価制度ですが、生徒に対して教科ごとに明確な努力目標を与えます。また筆答問題で高得点を取るには、読書量がものをいうことから、教科書以外の本を読むように刺激します。私は、このような環境の下で、特に「漢文」で習った《平家物語》などのリズム感のある文章に感動しました。後年、中国文学を専門にするようになったのも、この感動の延長です。私は、不運にも再度の転校のため、在籍わずか一年で、村上を去りましたが、村上中学は、私の一生の方向を決めてくれた永遠の母校です。（文京区湯島在住　日本学士院会員、東京大学名誉教授、財団法人東洋文庫研究員）

夫婦で歩んできたＮＧＯ活動

―おせち料理はテヘランで―

林　節子（旧姓上山）（新７回）

年の瀬も押し詰まった二〇〇三年の一二月二六日午後一一時、「イラン・バム地方に大地震発生！死者二万とも三万とも」というニュースがＴＶで流れた。この出来事によって、わが家の年末年始のペースは完全に狂ってしまったのである。

夜の〇時を過ぎていたが、夫は、所属しているＮＧＯ団体の事務局長宅に「すぐ、現地へとびます」と緊急出動の電話を入れた。実は、私たちは四日前の一二月二二日夜に、西アフリカのサハラ砂漠（モーリタニア・イスラム共和国）での援助活動を終えて帰ったばかり、サハラの砂・々・々の世界から解放されてホッとしたところだったのだが・・。大車輪で年賀状を書き上げ、そそくさとお供えを仏壇に、しめ飾りを玄関にぶら下げて、三一日に届くおせち料理に心を残しながら、三〇日午後、夫婦で成田を出発、結局、フランクフルト経由で着いたイランの首都テヘランで、お屠蘇もお雑煮も無い新年を、仲間の隊員二人と祝うことになった。私たち夫婦の任務は、被災地で救護活動に使う携帯用無線機五〇台を、イランの赤新月社（赤十字のこと）に提供することだったが、その無線機も、年末でどこのメーカーも御用納め、急きょお願いして、日本や米国の代理店からかき集めたものだった。

日本製無線機になじみの無いイランのエンジニアたちに使い方の説明をする必要があり、数日間、ホテルと赤新月社ビルを往復したが、テヘランは富士山の五合目とほぼ同じ高度にあり、高齢の私たちは最初の三日間、高山病症状で苦しんだ。「女の人は髪の毛をスカーフで隠さないと、お巡りさんに捕まりますよ」とＪＩＣＡの駐在員に脅かされたが、事実、イランはヘジャブ

夫（右端）とアラファト議長とは同い年

（イスラム教の身だしなみに関する戒律）が厳しく、一月五日にテヘランを訪れた川口順子外務大臣（当時）も、柄もののスカーフをかぶった可愛い写真が現地の新聞に掲載されていた。ともかくも、今、思い出すと慌ただしく明けた二〇〇四年の正月だったが、急きょ赤新月社に届けた無線機が被災地、バムで救助活動に役立ったことは嬉しい思い出のひとつである。人の運命とは全くわからないもので、三面川の源流を持つ朝日村の山中を駆けずり回っていた私が、夫と一緒に日本から何万キロも離れたイスラムの国々をNGO支援で歩き回るとは…、正に「インシ・アラー（アラーの神の御心のままに）」である。

（品川区在住・アマチュア無線家）

※今回の東日本大震災においては逆に海外からのNGOにより救援・支援活動をしていただきました。

（編集部）

村高と育まれし時と絆への想い

大多喜　勝（新8回）

わが母校、村上高校での一番の思い出は、木村三酉先生が、古文の授業で、「奥の細道」、芭蕉と曽良が二泊三日の村上滞在の一日、瀬波町に至り西奈弥神社や多岐神社に詣で、浜辺に出て、粟島を眼前に、遠く佐渡が島を沖に見て、日本海に沈む夕陽の荘厳な光景に見とれて、想いに耽りゆくくだりを流れる様に語られたことです。シチュエーションが素晴らしく、以降、真夏の夜空に天の川の星群がくっきりと見える瀬波の浜辺に望み、寄せかえす波音を聞いて遠い日を想うことが好きになりました。また、安富先生がとつとつと語る世界史、ゲルマン民族の大移動等などのくだりが当時わが心に強く印象付けられて、世界史だけがテスト結果、学年ベストテンにランクされた不思議があります。

村高第八回生徒といえば、太平洋戦争末期に国民学校へ入学、翌年に日本が敗戦の時を迎えたという年代の人間であり、その激変の時代の事象を見て参りました。今は八百長問題に大揺れの相撲界の力士達が、敗戦間近の瀬波の松原八丁の松並木の大木を伐採に動員されました。その時はただ、「お相撲さんがいっぺえこといるんさね」と、大人達と見物に行ったのでした。「あ、名寄岩だ、照国だ」とブロマイドで知る人気力士連が、鉢巻きを絞め松の大木を切り倒し、根っ子を掘り起こし汗していました。日本空軍は航空機の燃料に窮し「松根油」を採取し之に充てようとの試みであったことでした。

そして今、年齢老いて私がとても気になる思いは、親元を離れて幼い生徒達が大勢疎開してきて各組に編入されお寺に寄宿して通学していたことです。その方達にとれば真に切ない思いでの地、村上ではなかったかと思います。現在ご健在の該当の方々にどんなにか寂しかったであろう当時の経験を語り残していただきたいと思います。やはり戦争のさ中のつらい日々でありましたでしょう。

遠い日から半世紀以上も過ぎた現代は、インターネットで瞬時に故郷情報をキャッチでき、DVDで後輩達が学ぶ現在地の村高の校舎、設備、活動状況も鮮明に見ています。そして村高関東支部の役員幹事の皆様のお陰で、大先輩から卒業間もない後輩の方々とも交流がもて、老後の楽しみが増えました。また佐藤会長は、私の小学校級友の佐藤守殿の弟君であり、いつも変わらずお声をかけて頂き、私は村高の絆を有りがたく感じており、やはり有縁社会の大切さを痛感します。現住地では、一昨年から街おこしの一環として各県人会が発足し、「秦野新潟県人会」に所属して上越人が多いながらも、各種活動に参加し、村高人、村上郷里をアピールしております。

このような絆を今後も大事に、大事にして参りとうございます。そして村高人は、国旗や国歌を愛し、郷里を大切に想う民で在ることを信じております。

（秦野市在住）

柔道部北陸大会制覇

小林　正明（定13回）

私は家庭の事情で昭和三三年四月村上高校定時制夜間部へ入学しました。当時国内は終戦後十余年で経済や景気が上向きになり生活も落ち着いて来た時代でした。歴史ある城下町村上は市制約四年、発展途上で市街地などは活気にあふれていました。白黒のTVが出始め、映画館も二箇所あって日活などの映画を上映して賑わっていました。当時の村高には全日制と定時制があり、定時制はさらに昼間と夜間部に別れ、その他に分校が三箇所ありました。

私が通学したのは夜間部で一クラスで四五名でした。幅広い年代で昼間はほぼ全員が仕事を持って働き夜間高校に通学して授業を受けていました。昼は仕事、夜は勉強の厳しい生活でしたが皆仲良く助け合い楽しく勉学に励んでいました。今では懐かしい思い出となっています。私の実家は豆腐屋で母親が病弱だったので家業の手伝いをしなければならなかったのです。昼間は母親から仕事の手ほどきを受けました。私の仕事は主に御得意さんへの配達や朝日村などへ行って豆腐の出張販売をすることでした。朝は早く手作業で忙しいものでした。当時は自家用車もなく、どこへ行くのも自転車でした。特に冬場は雪が積もり路面が凍ってしまい自転車に乗れず荷台に積んで押しながら歩きました。時には二〇キロ以上も雪道を歩くので冬というのに大汗をかき心身ともに疲れました。その後、夕方早めの食事をして学校に通学して授業を受けた高校生活でした。

夜間部四年生の時、柔道部の野田晋先生が水原高校から転勤してきました。先生は東洋大学柔道部の監督もしておりました。また、教え子の柔道選

手、西潟誠一、古川立夫、堀竜三郎の三名も先生と一緒に本校に転校してきました。私も柔道部に所属していた関係で他の三名とともに先生に誘われ、転校してきた三名と一緒に毎日午後三時から学校の道場で先生の指導で大会を目指し稽古に打ち込みました。約二時間の厳しい内容であり、私は体が小さいこともあって体力が持たないと感じました。西潟君と古川君は県高校柔道の指定強化選手でしたので抜群に強い選手でした。私たちとは力の差が有り過ぎました。何度もやめようとしましたが、その都度、先生に暖かく激励され、なんとか付いて稽古に励み最後まであきらめることなく部活を続けることが出来ました。そして大会に臨んだところ、県大会団体戦で優勝したのです。さらに県代表として金沢市内で開催された北陸四県高校柔道選手権大会にでも団体戦で優勝することが出来ました。私たちが優勝出来たのは野田先生の指導と関係者の皆さんが激励と協力を惜しまなかったからで、支えてくれた方々に感謝でした。

後日、学校・市・ロータリークラブなどの方が盛大に祝賀会を開催してくれて多数の方々からお祝いの言葉などを頂きました。この時の感動は生涯忘れられない思い出となりました。

卒業後は村上を離れ埼玉県警に入り四一年勤務をして定年退職、その後、交通安全協会で六年間お世話になりました。現在は喉頭がんを患った事もあり自宅で年金暮らしです。病気をしてみて感じるのは健康第一です。これからは一層健康に留意して一日一日を大切にして一度のみの人生を楽しく前向きに頑張って行くつもりです。

（北本市在住）

まぼろしの甲子園

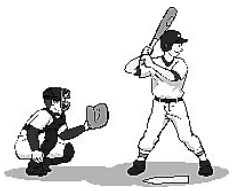
小田　洋雄（新15回）

私は村上の上片町で育ちました。山辺里川や三面川、お城山と、毎日毎日、日が落ちるまで幼なじみの仲間と夢中になって遊び回っていました。幼い頃の思い出が本当に懐かしく浮かんできます。貧しかった時代だったはずですが素直にイキイキと輝いています。村高では野球部に入部しておりました。体が大きかったからかキャッチャーで五番を打っていたと思います。当時は部員も少なく、なんとなくパワーがあればレギュラーのポジションをゲットできたような気がしています。

一九六一年、高二の夏に考えられないドラマが起きていました。全国高校野球選手権大会新潟地区予選会で我が村高が、あれよあれよと勝ち進み運も味方に入れ県大会で、なんと優勝してしまったのです。そして自分は夢の夢の甲子園へと！

信じていただけますか？村高の野球部が県大会で優勝したなんて！約半世紀前の出来事ですので記憶も少し曖昧な感もありますが本当の話です。いや話のはずです。まじめに考え種明かしをしますと、今は一県一校の出場ですが、あの当時の夏の甲子園の地区予選は北越大会と言って新潟県の優勝校と富山県の優勝校とが決戦を行い勝者が甲子園に出場する事が出来たのです。残念です！村高は富山県に敗れてしまいました。あと一球、あと一振りで甲子園には出場出来なかったのです。泣きました・・・・・。ですが、なぜか自分は新潟県の高野連の招待で村高を代表して甲子園に行けたのです。ネット裏でのドキドキの観戦でした。夢の甲子園では法政二高のエース柴田勲と関西の浪商の怪童、尾崎行雄のライバル物語がハンカチ王子とマー君の対決のように話題となり日本中が大騒ぎになっていました。その準決勝の熱戦対決をこの目で見ました。尾崎の投げるボールは流れ星のように速かった事と法政二高のユニホームがメッシュだったことにはただただ驚きました。昨日のことのように目に浮かぶ、すごい思い出となりました。

今回は村高の野球部が新潟県で優勝したこと、その後、富山県に破れて甲子園に行けなかったこと。



しかし、自分は甲子園に行ってきたというお話です。

東京に住んで走り回っているうちに半世紀になりました。毎年二回くらいは村上の風に浸りたくて帰るようにしていますが最近少しずつ故郷が遠くなりつつあるのは年のせいでしょうか？それとも酒の友が見つからないからでしょうか？一杯お誘いください。今は野球のバットをゴルフクラブに変えて毎日素振りをしています。ラウンドもお誘いください。

（世田谷区在住）

※一九六一年の夏、甲子園には新発田農高が出場しています。村高県大会優勝の真実は？お知りの方は寄稿をお願いします。

（編集部）

退職後「俳句」＆アロマ、エトセトラ

尾木由起子（新19回）

都立の養護学校勤務の頃よりテレビでサッカーを見るのが好きになった。ストイコビッチ選手のプレイのうまさがきっかけである。Ｊリーグ観戦を経て、日韓ワールドカップを機にイタリアのトッティ選手のファンになり、今ではかなりのロマニスタ（ローマチームのサポーター）で、スカパーでセリエＡを観るのが今の一番の楽しみである。長友選手がチェゼーナからインテルミラノに移籍したのには驚いた。

また、退職後に俳句を始めた。まだ初心者で一句作るのにも四苦八苦であるが月一回の句会を楽しんでいる。

この冬はアメリカに住んでいる娘の出産の手伝いのため二ヶ月程シカゴで過ごした。

降りしきる雪のシカゴや吾子眠る
舞ふ雪の光る窓辺に赤子抱く
雪眩しリスの目立ちし街に来て

子供を除けばたった一人になった肉親の母が村上に居るので時々は会いに行く。だいたいは瀬波温泉の大観荘などで、母と温泉に浸かり、足つぼマッサージなどをしてもらい、日帰りで帰ってくる。マッサージをしてもらうと入浴料は無料である。今年は雪が多く海岸線も雪で覆われていた。

荒波の白きあぶくや春隣

それから今熱中しているのがアロマセラピーである。ラベンダー、ローズマリー、カモミール、ゼラニウム、ベルガモット等々のエッセンシャルオイル（精油）になんと様々な薬効などの効能のあることか。数学が苦手で薬学部を断念した私であるがアロマオイルについて学習し、いろいろな事に活用し楽しんでいる。

テレビで将棋を見るのも好きで、日曜のＮＨＫ将棋トーナメント戦はほとんど見ている。年齢の上の人と女性棋士を応援しているが、やはり若い人が強い。今回の竜王戦も羽生名人は若い渡辺竜王に負けた。

又、運動不足解消と姿勢をよくしたいと、近くのアスレチッククラブでダンスもやっている。上手くなることは望まず、クラシック音楽に合わせてゆっくりやっている。それから楽器の習い事、あきれるほど上手にならないが、先生のおだてとやめると老化に拍車がかかりそうで、十数年続いている。読書も好きで最近は日本古代史に関したものをよく読んでいる。

勤めていた頃も生徒たちは可愛く、楽しかったが、退職後がこんなに充実できるとは思わなかった。何より家族と時間を気にせず、しっかり向き合えるのがうれしい。退職して五年になろうとしているが、一年一年があっという間に過ぎていく。毎日を大事にしていきたい。

（武蔵野市在住）

一七年ぶりの冬の村上

向井　順子（新29回）

執筆の依頼があったものの何を書いて良いのか分からない。今までの広報紙を読み返すと諸先輩方の投稿はさすが見聞広く見識が高く味わいのある文で感心してしまう。家の中であれこれ考えても、さっぱり浮かんでこない。

二月に帰省する予定だったので、ならば道中の車中からの雪景色や実家の窓から日本海の荒波を眺めていれば何か浮かんでくるだろうと、その日を待つことにした。

じつは、この冬「意を決して！」帰省しようと思ったのは一年くらい前から少し気に掛かる事があったからだ。私の母は年に何度か、あれやこれやいろいろなものを詰めて荷物を送ってよこすのだが、荷物と一緒に入っている一筆箋に「そっちはいいね。いつもお日様マークで。こっちは毎日雪だるま。そんなことはいつものことだから仕方ないと分かっているけど、やっぱりそっちの天気がうらやましい。」と書いてくるようになったのだ。今までこんな事を口に出す事は無かったのに、この頃は毎回こんな風に書いてくる。八〇を過ぎた母は一年一年、雪国の冬の生活がつらくなっているのではないか？春が待ち遠しくて仕方ないのだろう。

『意を決して！』と書いたのは三〇年以上も横浜で暮らしているうちに私の体は暖かさに慣れてしまい寒いのが苦手になって冬の故郷にはどうしても帰る勇気が無かったのだ。ただ天気予報をＴＶで見ては「こっちはこんなに晴れているのに、あっちはまた雪だるまか…」などと憂えているだけだった。けれど母の手紙が気に掛かり、今年からは冬も顔を見せに帰ろうと意を決したのである。

故郷に着いた日は雪は降っていなかったが一週間前までは村上市街も山北もかなりの雪が降り積もり、毎日除雪車が出動していたようだ。今年初めて、いや何十年ぶりかに雪の上を歩いた。ギュッ、ギュッと雪を踏みしめると鳴る音がおもしろくて子供のように心がはしゃいだ。

翌日は義妹の車に便乗して買い物に出かけた。「ちょっと村上観光でもしますか？」というので私もその気になった。案内役の義妹は村上育ちで町の隅から隅まで詳しい。子供の頃よく遊んだ町、初めて通る町もあり楽しい市内観光だった。町は雪に埋もれ人通りも無く寂しい限りだったが、三月になれば町屋の人形様巡りも始まり人も出てくるとのことだった。

そう言えば七月の村上大祭も小学生の時に見たきりだ。弟が「明かりを灯した屋台が神社に帰る様はすばらしいから一度は見た方が良い。」と言うので今夏はそれを実現しようと思っている。

どうやら冬に実家に帰ったのは家族の話では一七年ぶりらしい。そして村上大祭も小学六年の時に見たのが最終だから…。自分でも驚く程のご無沙汰をしていたのだった。

故郷からどんどん離れていった自分を今度は少しずつ近づけていこう思っている。

（横浜市中区在住）

維持会費納入の
ご協力をお願いします

同窓会関東支部の活動を支える唯一の財源として、皆様に年間一口（2000円）以上の維持会費をお願いしています。同封の振り込み用紙にて納入をお願いします。

昨年度は沢山の方々からご協力をいただきました。本年度もなにとぞ、よろしくお願い申し上げます。　（事務局）

第四六回臥牛会 ゴルフコンペの結果

平成二二年一〇月二二日（木）茨城県取手市の取手桜ケ丘ゴルフ倶楽部にて二三名参加のもと臥牛会の秋季コンペが開催されました。

成績は左記の通りです。

・優　勝　藤山洋一（16回生）
　ＮＥＴ６８
・準優勝　北岡亮子（24回生）
　６７
（※規定により初参加は二位に）
・三　位　中村和憲（18回生）
　７１
・ベスグロ　上野陽之助（13回生）
　９２

第四七回臥牛会 ゴルフコンペの結果

平成二三年四月八日（木）野田市の紫カントリークラブあやめコースで予定されていた四七回コンペですが、未曾有の大惨事となった東日本大震災の発生による諸事情により開催が延期となりました。二八名が参加予定でしたが、仕切り直しとなります。

延期の日程は五月一七日（火）場所は同じく紫カントリークラブですが東コースとなりました。このため今回の広報紙締め切りに結果が間に合わなくなりましたので、コンペの結果はホームページでお知らせして、次回広報に三大会の結果をお知らせすることとなりました。

ふるさとだより「村高は今」

学校長　市村　徹

昨年は支部総会にお招きいただきありがとうございました。多士済々の会員の方々に圧倒され、加えて見事な運営に感動いたしました。ここで、「村高」の現況について四季折々の行事等を踏まえて簡単に紹介いたします。

春（4月～5月）

入学式では新入生に対して野球部員による校歌の披露を行い、堂々とした校歌斉唱に感動している様子が伺われました。4月半ばには新入生の宿泊合宿が瀬波温泉で実施されました。３年間本校で学ぶためのオリエンテーション合宿です。5月の連休明けには各運動部の地区大会が開催され、各部とも日頃の成果を発揮してくれました。また、今年度より新企画の県大会出場への壮行会が実施されました。中旬にはＰＴＡ総会が開催され、多数の保護者の参加を得ました。

夏（6月～8月）

盛り上がる体育祭

6月に入り、県大会において女子ソフトテニス部と陸上部が北信越大会の出場権を獲得し、特にソフトテニス部は創部以来初の北信越大会団体優勝を成し遂げました。また、8月の沖縄インターハイへの出場権も得ました。半ばには記念体育祭が開催され、全18クラスの対抗戦形式で競い合いました。隣接する地域振興局からは毎年激励の横断幕が掲げられ、一層盛り上げて頂いています。7月後半には校内球技大会が３日間実施され、28日から夏休みとなりました。この時期に地区ＰＴＡが開催され、クラス担任をはじめ多くの先生方が各地区に出向いて懇談をしました。また、ダンス部、吹奏楽部は地元のイベント行事への出場依頼などで大活躍していました。

秋（9月～11月）

9月早々に中学生対象のオープンスクールがあり、近郷の中学生約300人が参加しました。後半には記念学園祭（文化祭）が開かれ、今回から3年生も加わり、ＰＴＡ主催の餅つきなどもあり賑やかな一日でした。10月2日には創立110周年記念式典が挙行され、併せてオペラの公演や祝賀会など盛りたくさんの行事が計画され、すべて成功裏に終了いたしました。特にオペラ公演に先立ち、開会のファンファーレを吹奏楽部の生徒が見事に演奏し盛り上げてくれました。

冬（12月～3月）

12月の中旬に2学年の修学旅行（沖縄）が３泊４日で実施されました。2学期の中ごろから始まったＡＯ入試や推薦入試、その他の試験結果が12月後半にほぼ出揃ったのでお知らせします。国公立大17名、私立大29名、私立短大7名、専門学校35名、その他1名という例年並みの結果でしたが、後半の一般入試には更に頑張ってくれるものと期待しています。1月中旬のセンター試験に174名(74.7％)が受験し、会場の敬和学園大学に多くの先生方が激励に馳せ参じました。

ダンス部の演技

このように近況を簡潔にお知らせ致しましたが、校内において生徒は実に礼儀正しく、きちんとした挨拶が交わされており、県北を代表する学校として地域の多くの方々より好評をいただいています。日頃、生徒達には「文武両道」を実践し、社会に通用する人間であるようにと諭しています。なお、関東方面への進学者は例年約90名弱となっています。今後とも本校に変わらぬご支援・ご鞭撻をお願い申し上げます。

編集後記

東日本大震災の被災者の方々にお見舞い申し上げます。

母校の市村校長先生はじめ、快く寄稿頂きました方々に感謝いたします。

昨年はＴＶで「ゲゲゲの女房」が話題になりましたが小田さんの奥さんはプロボーラー中山律子さん、尾木さんの旦那さんは教育評論家の尾木直樹さんです。さらに先輩には歌手赤坂小梅さんを奥さんにした方もいらっしゃいました。紹介すると余計なことをと言われるかもしれませんが、絆や縁の不思議さを感じながら編集を行わせていただきました。未熟なところはどんどんご意見をいただければありがたいです。

山下治郎